

§1 渡印求法の中国僧

桑原鶴藏「入竺求法の僧侶」1908 『桑原鶴藏全集』第2巻所収

「東漢末以後に於ける入竺求法の僧侶は千を以て数ふべく、一々枚挙するに暇あらず・・・」
ほかに海路があるが、陸路はおよそ三条に分類し得る。

○南道 崑崙の北麓沿いに西進、ホータン、ヤルカンドなどを経、葱嶺をこえてパミールより
インダス河の上流に沿い、北インドにはいる (西域南道)

○北道 天山の南麓沿いに西進、トルファン、カラシャール、クチャ、アクスなどを経、氷嶺
で天山を横切り、天山北路より中央アジアを経て北インドにはいる (西域北道)

○吐蕃泥波羅道 黃河の上流、西海の側を過ぎ、チベット、ネパールを経て北インドにはいる
もの (吐蕃道)

長澤和俊「『大唐西域求法高僧伝』小考」1976 『シルク・ロード史研究』所収

唐の義淨がインドおよびスマトラにおいて親しく相遇したまたは伝聞した初唐、7世紀後半の渡天竺僧は、再訪した4人を含め65人いた。

*往路に利用したルートによる分類	*インドまたは師子国に到達できなかった者	23人
西域路 14人	途中で死亡したもの	12人
吐蕃道 8人	シュリビジャヤに滞留した者	2人
南海路 41人	行方不明の者	2人
経路不明 2人	途中から帰国した者	7人
	到達できた者	41人

*目的地に到達した者 41人のその後	*途中死亡者を含め帰路のルートによる分類	
インドまたは帰途死亡した者 18人	西域路	9人
無事帰国した者 5人	吐蕃路	5人
行方不明の者 11人	南海路	10人
彼地に滞留した者 7人		

§2 玄奘三蔵の生涯

僧玄奘（602頃～664） 河南省陳留の人、地方官僚の子、兄を頼って洛陽に出て、13歳で得度法名を玄奘とした。四川省成都などで修行を積み、23歳で国都長安に移った。仏教教理を研究するため天竺（インド）に渡る悲願を立て同志の数僧とともに唐朝に願い出たが許されず、ついに國禁を犯して単身インドに向かう決意をかためる。

貞觀3年(629)9月出発。蘭州で黄河を渡り、河西回廊を通る。高昌国王鞠文泰の厚遇と庇護を受け。天山南路の屈支国（クチャ）、跋祿迦国（アクス）を過ぎ、天山山脈を凌山（峠の名）で北へ越え清池（イシク湖）の岸にいたる。イリ河上流域、シルダリア上流域を西進する。西突厥の葉護可汗に会い庇護を受ける。トルキスタン低地を南下、縛葛河（アムダリア）を南へ渡り、現在のアフガニスタン北部低地に到了。大雪山（ヒンドゥークシ山脈）を越え、梵衍那国（バーミアン）を訪れたのち、出発後2年にして北西インドのガンダーラ地方に入った。

カシミール国王都シュリーナガルに2年間滞在 ガンガ中流域各地を巡歴 ルンビニ（誕生の地） クシナーラー（入滅の地） ベナレス郊外鹿野苑（最初の説法の地） ブダガヤー（成道の地）、

仏教の聖地マガダ国に到着、王舎城のナーランダー寺を中心としてこの地に5年間滞在、仏法研究に精進。のち数年を費やして東天竺、南天竺、西天竺の各地を巡歴する。

641年秋帰国の途につく。海路をとることを薦められたが、帰途に高昌国訪問の約束があった。

玄奘は帰途に、唄叉始羅国(タキシラ)、伐刺摩國(パンヌ)、迦畢始國(チャリカール東方)安怛羅縛婆國(アンダラーブ川流域)、闕悉多國(コスト川上流域)、活國(クンドゥーズ地方)を経由した。ヒンドゥークシュ山脈を Kawak 峠または Salang 峠で越えたものと考えられる。

活國から併沙國(カーシャ、カシュガル)にいたるあいだに経由したおもな国

賈健國(ムンカン、ハーナバード付近)、鉢創那國(バダクシャーン、ファイザーバード)、達摩悉鐵帝國(ダルマスティ、イシュカシム付近)、渴槃陀國(カツバンダ、タシュクリガン)瞿薩旦那國(クスタナ、ホータン)から太宗に帰國の許しを請い、泥壙城(ニヤ)、摩駄那(チエルチエン)、納縛波故國(樓蘭)などを経、貞觀19年(645)長安に帰着した。

収集、将来したもの：釈迦如來の舍利150粒、仏像6軀、經典657部

長安の弘福寺のち慈恩寺などで經典の翻訳、地誌『大唐西域記』編纂に従事、麟德元年664死去

§3 パミール

pair·mir <foot of mountain> 山の麓

「氷河作用によってできた山地渓谷であって、付近および他の山地渓谷との相違は、その秀でた高度のみにあり、かつ相当程度まで、その溝渠が、氷河作用による岩屑と沖積土によって満たされている、というところにある。」

G.N.Curzon, *The Pamirs and the Source of the Oxus.* 1896

東西、南北ともに約350km、海拔約4000mの一大山岳地域にパミールという特有の性質をもつ谷が8つあり、広義には8つのパミールをふくむ山域全体をパミールと呼称する。

1.Taghdumbash Pamir, 2.Pamiri-Wakhan, 3.Pamiri-Khurd, 4.Pamiri-Kalan,
5.Alichur Pamir, 6.Sarez Pamir, 7.Rang Kul Pamir, 8.Khargosh Pamir

1.は Tashkurgan 川源流にあり (Yarkand 河水系) 他はすべて Pyandj or Panj 河流域にあり (Amu Darya 水系)、ともに内陸河川流域をなす。また 1.は中国新疆ウイグル自治区喀什地区に、2.~4.はアフガニスタン国バダクシャーン州に、5.~8.はタジキスタン国ゴルノ・バダフシャーン自治区に属する。

グレイト・ゲームの重要な舞台のひとつになる。

ロシア帝国の中央アジア進出 大英帝国の植民地インドの北辺防衛 国境協定 1895

大陸的気候で雨と雪は多くはない。冬は長く寒冷、永久凍土帯もある。

7000m峰として Communism 7495m Lenin 7134m Korzhenevskaya 7105m

中国領に Kungur 7719m Muztagh Ata 7546m

6000m級は Revolution 6987m Moscow 6785m Karl Marx 6726m など多い。

北部にある Fedchenko 氷河は長さ約72km、中低緯度にある山岳氷河のうち最長

§4 ワハーン通廊

ピヤンジ河の源流 Wakhan 川と支流パミール川の谷を中心に、合流点からイシュカシムの大屈曲点にいたる部分までを含む。東西約260km、南北の幅約20~30kmの河谷

水源の Wakhjir 峠 4755m イシュカシム付近 2400m

北にはパミール山地南縁をなす Sadarīn 山脈と Wakhan 山脈が、南には Hindu Kush 山脈がつらなる。タジク系、ワヒ農牧民が居住する。

古来バクトリア平原とタリム盆地を結ぶ交通路として利用されてきた。

玄奘が残した記録からうかがえるパミールとワハーンの姿

資料②『大慈恩寺三蔵法師伝』巻の第五からの抜粋

・・・ここから東行二百余里で鉢創那国に至った。ここもトカラの故地である。寒さと雪のため、法師はここに一月あまり滞在した。バダクシャーンから東南方へ山道二百余里で淫薄健國インヴァカンにつき、さらに東南に険路をゆくこと三百余里で屈浪土擎国クラナに至った。ここから東北方へ山道をゆくこと五百余里で、達摩悉鉄帝国ダルマステティイに至った。この国は二つの山の間にあり、ヴァクシュ河に臨んでいる。形が小さくてしかも健やかな善馬を産する。風俗は礼儀を知らず、性凶暴で、形も醜悪であり、眼は碧緑色の人が多く、他の諸国と異なっている。伽藍は十余ヶ所にあり、その国都は昏駄多城カンダータである。

・・・ここからまた東方に山道を進むこと七百余里で波謎羅川に至った。この川は東西千余里、南北百余里で、二つの雪山の間にあり、葱嶺の中にはて風雪が吹きまくり、春夏になんでも止まない所である。その地はいたって寒いので、草木もきわめて少なく、穀物も稔らない。この付近一帯は蕭条として人影も見ない所である。

・・・この河谷から東方に出て、危険な道を登り、雪を踏んでゆくと、五百余里で渴槃陀国に着く。城は峻嶺の上に建てられ、北側に徒多河が流れている。その河は東方に流れてはるかかなたの塩沢に入り、その後地下を潜流して積石山に出て、中国の河源黄河の源流となっているのである。

資料④『大唐西域記』巻第十二からの抜粋

達摩悉鉄帝国は二つの山の間にあり、観貨邏國の旧領である。東西千五、六百里、南北の広さは四、五里で、狭い所は一里を越えない。縛麌河に臨み、曲がりくねっている。小高い丘が或いは高く或いは低く、砂や石が一面である。寒風は凄じく、ただ麦や豆だけを植えている。樹林は少なく、花・果に乏しい。多く良馬を産する。馬の形は小さいけれども、山地を馳涉するに耐える。人々の間には礼儀なく、人の性質は乱暴である。姿形は卑しく、衣服は斂や褐である。眼は碧緑である点が諸国に異なっている。伽藍は十余ヶ所、僧徒は少ない。昏駄多城は国の都である。・・・

渴槃陀国は周囲二千余里ある。国の大都城は大きな岩山に基礎を置き、徒多河を背にしており、周囲二十余里ある。山々が連なり、川原は狭隘で、穀作は僅かで、菽・麦が豊富である。樹木は稀で、花・果は少ない。丘も野も荒れはて、城や村も住民は少ない。俗として礼儀なく、人々には学芸も乏しい。性質は荒々しく、武力の点でも驍勇である。容貌は醜く、斂や褐を身に着けている。文字・言語は、おおむね佐沙国と同じである。さりながら信仰は心得て、仏法を尊崇している。伽藍は十余ヶ所、僧都は五百余人、小乘教の説一切有部を學習している。・・・

[参考資料]

- | | | |
|---------------------|---------------------|-----------|
| ①前嶋信次 (1952) | 『玄奘三蔵』 | 岩波新書 |
| ②慧立・彥悰/長澤和俊訳 (1998) | 『玄奘三蔵』 | 講談社学術文庫 |
| ③中野美代子 (1999) | 『三蔵法師』 | 中公文庫 |
| ④玄奘/水谷真成訳 (1971) | 『大唐西域記』 | 平凡社 |
| ⑤東山健吾 (2004) | 『シルクロードの足跡』 | NHKライブラリー |
| ⑥長澤和俊 (1993) | 『シルクロード』 | 講談社学術文庫 |
| ⑦酒井敏明 (2000) | 『旅人たちのパミール』 | 春風社 |
| ⑧平位 剛 (2003) | 『禁断のアフガニスタン・パミール紀行』 | ナカニシヤ出版 |